

松本 奎堂(まつもと けいどう)

天保2年(1832)12月—文久3年(1863)9月25日

三河国刈谷城三の丸に生まれました。三河刈谷藩士、天誅組総裁、尊攘派志士。

諱:孟成、衡。字:士権。通称:謙三郎。雅号:奎堂、孺川、洞仏子。父(松本印南維成)が刈谷藩用人兼漢学甲州流軍学師範という環境から、11歳で名古屋尾張藩儒臣奥田桐園に入門。

伊藤兩村のもとで朱子学を修めました。若くして父を助けて門弟を教授し、18歳のとき槍術稽古で左眼を失明しました。

尾張国愛知郡沓掛新田村の庄屋でもありました。江戸に出て大槻磐溪、羽倉簡堂につき、嘉永5年(1852)、昌平黌に学びます。翌年江戸藩邸に帰って教授兼侍読となりましたが、議論激直のため忌まれて1年間禁固に処せられました。

安政2年(1855)、再び昌平黌に学びました。同6年(1859)名古屋城下石町で開塾。

文久元年(1861)、大坂で昌平黌の同学松林廉之助、岡千仞と双松岡学舎を開塾。

翌年京都に移り藤本鐵石、吉村寅太郎ら尊攘激派の志士と交わりました。

島津久光の率兵東上を利用して討幕を計りましたが急変し、淡路へ逃れます。

同3年(1863)8月、天皇大和行幸の詔が出たのを機に藤本、吉村らと天誅組を組織して総裁となり、侍従中山忠光を奉じて出京します。

大和五条の幕府代官所を襲撃し、租税半減を布告して人心を収めました。京都で起こった「8月18日の政変」によって形勢は急変し、行幸は中止となりました。

紀伊、彦根藩兵により追討され、十津川郷に南下し郷土と農兵の参加を募ります。

しかし、諸藩兵の攻撃を受け、戦闘のなかで敵弾を右眼に受けて、盲目となり、吉野郡鷺家口で自刃しました。享年33歳。

辞世の句:「君が為めみまかりにきと世の人に語りつきてよ峰の松風」

## 68 広島藩蔵屋敷跡

北区中之島4

- ▶ 広島藩は浅野家を藩主とした40万石の大名です。蔵屋敷の規模も他藩に比べると最大級の規模であり、3900坪(12,892㎡)もの広さがありました。幕末の広島藩は、第一次長州征伐の時、征長軍の拠点となりましたが、第二次長州征伐の時は長州擁護の立場を取り、出兵させませんでした。薩長芸三藩同盟が締結しましたが、土佐藩から大政奉還の建白書が提出されると、広島藩からも建白書を提出しました。このことを薩長二藩は背反行為とみなしました。その後、討幕の密勅が薩長に下ったとき、広島藩には下りませんでした。そのため、維新の主流から外されてしまいました。

平成7年(1995)より大阪市教育委員会と財団法人大阪市文化財協会が広島藩大坂蔵屋敷跡の発掘調査を行い、「蔵」や「船入」遺構が明らかとなっています。

慶応2年(1866)に作成された「芸州大坂御屋敷全図」が残っており、その絵図によりますと藩主が参勤交代時に滞在する「御殿」、役人が居住する「長屋」、米や特産物を収納する「蔵」、それらを荷揚げするため堂島川から屋敷内に船ごと入ることができる「船入」が詳細に描かれています。

船入がある大坂蔵屋敷は、広島藩を含めて8藩しかありませんでした。

船入の北側には「厳島神社」を祀っていたこともわかります。

また、北西(地図の左上)に「蛸の松」があったこともわかります。

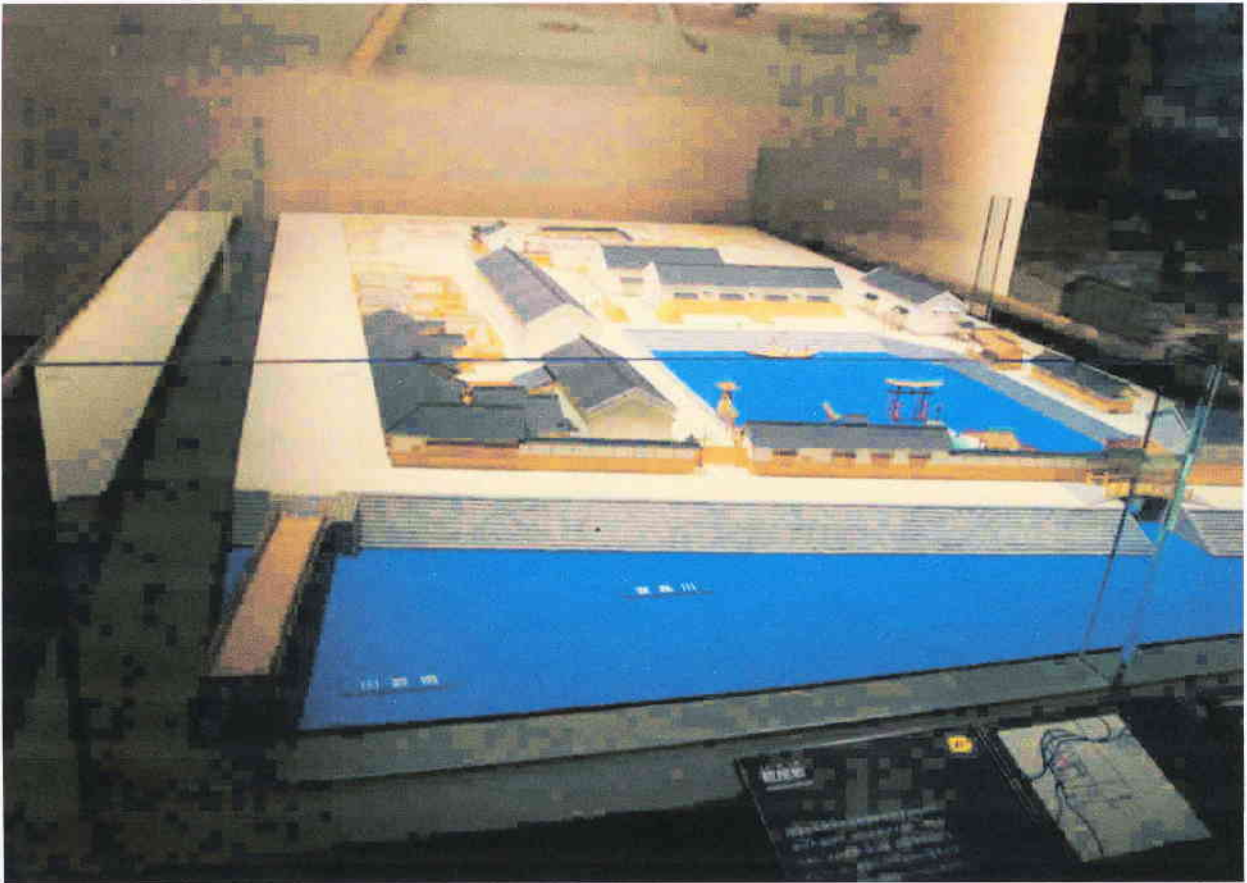


広島藩蔵屋敷跡





大阪歴史博物館の展示「広島藩蔵屋敷」のジオラマ(模型)



# 69 鳥取藩蔵屋敷跡

北区中之島3(ダイビル)

▶ 広島藩蔵屋敷の東隣に鳥取藩蔵屋敷がありました。鳥取藩は元和3年(1617)に池田光政が姫路藩より転封してきて以来、池田氏が鳥取藩を治めます。徳川家から信任が厚く、松平姓を名乗ることを許されていました。第12代藩主 池田(松平)慶徳は、水戸藩主 徳川斉昭の五男で、第15代将軍 徳川慶喜の兄にあたります。

日米和親条約調印に不満だった慶徳は、福井藩主 松平慶永、徳島藩主 蜂須賀斉裕と合議のうえ建白書を提出しています。鳥取藩では尊攘派が藩政を掌握しており、長州藩には同情的でした。しかし、第二次長州征伐では、仕方なく幕府軍に参戦します。

新政府樹立後、藩論を勤王にまとめ、新政府軍として参戦しました。東山道参謀総督に抜擢された同藩 河田佐久馬は大活躍します。



今秋、立替が決まっているダイビル

鳥取藩蔵屋敷跡



鳥取藩第12代藩主 池田慶徳

鳥取藩大坂蔵屋敷に、文久3年(1863)1月9日、勝海舟が鳥取藩主 池田(松平)慶徳に面会するため訪れています。

「海舟日記」には次のとおり記載されています。

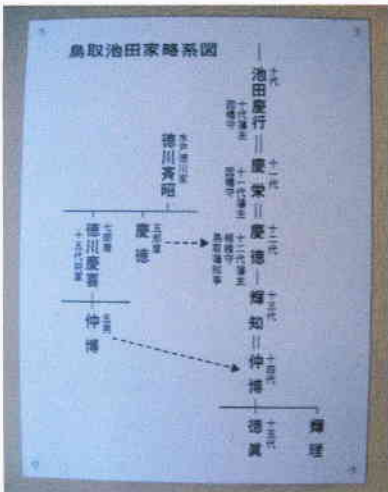
因州侯(池田慶徳)の邸に到る。海軍の事、並びに警衛の大体を論ず。御同人の巨数輩、我門に入ることを談ぜらる。 (省略)

坂本龍馬と一緒に江戸より来坂していた鳥取藩剣術指南役の千葉重太郎は、主君である慶徳の命により、当時大坂にいた勝海舟を同藩大坂蔵屋敷に招こうとしている場面が、次に紹介する小説で描かれています。

津本 陽 著の「龍馬 第2巻」(角川書店)のP353より

「それは、ありがたい。楽しみですのう。ところで先生、重太郎さんからお頼みしたいことがあるがです。聞いてつかあさい。」重太郎が用件をきりだした。「私の主人松平相模守は、上洛して帰国の途中、大坂宗是町の蔵屋敷に逗留しております。今度、勝殿が兵庫、大坂におられるうちに、ぜひにも屋敷へお越しいただき、海軍についてのお説を拝聴したいものだと申しております。何とかお運び願えませぬか」

因州鳥取三十二万石の太守、松平相模守慶徳は、将軍後見職一橋慶喜の兄だった。



鳥取城跡にある「仁風閣」

**仁風閣**

仁風閣は、明治40年、旧鳥取藩主池田家の14代池田仲博侯爵が宮内省匠頭片山東熊博士に設計を依頼して建てた、フレンチ・ルネッサンス様式の白亜の洋風建築です。

完成後、時の皇太子(のちの大正天皇)行啓の宿舎として使用されました。この時、随行した東郷平八郎海軍大将によって「仁風閣」と命名されました。

大正12年、池田家から県に寄託され、その後は公会堂や迎賓館に、戦後は科学博物館に使用されてきました。

昭和48年、国の重要文化財に指定され、大修理を施して、建築当時の美しい姿になっています。